

『北九州モデル』導入の体験談を紹介します！



先人たちの声。

『複合型福祉施設 プロムナードとばた』
施設長 和田 一哉 様



『複合型福祉施設 プロムナードとばた』 地域密着型 特別養護老人ホーム 定員 29 名 ほかに計 4 事業所

主な取組と成果

インカム（※インカム型トランシーバー）と見守り機器の導入、入浴、食事、排泄、洗濯業務について業務改善を行った

取組前 介護記録システム、マットセンサー7台、ベッドサイドセンサー2台

取組後 Wi-Fi 工事、介護記録システム、インカム 10 台、スマートフォン 4 台、バイタル型見守り機器 6 台、カメラ型見守り機器 6 台、マットセンサー 16 台、ベッドサイドセンサー 8 台
※介護ロボット導入補助金を一部活用して導入

夜勤帯の人員配置 2.6 人（テクノロジーを活用した夜勤職員配置加算基準）で運用

取組前 R3.4～6 月夜勤職員配置加算（Ⅱ）イ算定、R3.7 月加算算定なし

取組後 R3.8～10 月夜勤職員配置加算（Ⅱ）イ a（見守り 10% 0.9 人配置）算定
R3.11 月夜勤職員配置加算（Ⅱ）イ b（見守り 100% 0.6 人配置）算定

施設全体で月当たり約 600 時間の効率化 → コロナ対応をする時間、産休職員の業務補完へ活用
半期で全体 40 日の休暇取得促進

今後取り組みたいこと → タブレット端末等の増加、音声記録ソフトの活用



入居者様、ご家族の安心感につなげたいと考え、事業に参加しました

新型コロナウイルス感染症により、ご家族の皆様とコミュニケーションを図り、施設の情報を伝えることが難しくなっていたため、**行政と一緒に新たな取組を行うことは安心感に繋がると考えたことはきっかけとして大きかったです。**

また、複合施設 4 事業所の中で、常勤職員約 40 名のうち 6 名が年度内に産育休を取得することが判明しました。加えて、夜勤職員の確保についても課題を感じており、**介護ロボットや ICT を活用し、柔軟に勤務を組めるような体制構築をしたいと考え、北九州モデルの導入を決めました。**

「北九州モデル」導入にあたって、大変だった部分について

なぜ北九州モデルの取り組みを行うのか、意義を伝えていくことは大変でした。施設が抱えている課題とリンクさせて説明し、北九州モデルはそれを手伝ってもらえる取り組みであることを繰り返し伝えていました。

また、コロナ禍でご家族の皆様との情報連携が難しくなるため、行政の取組を行うことで、ご家族の皆様へ安心感を与えたいということも、併せて伝えていきました。

機器を多く導入した時期や、9 月頃に行った業務課題抽出検討シート作成時期が大変だったと思います。あまりに注力しすぎないようにアドバイスをする場面もありました。

真剣に取り組むことってすごく良いことなんですけど、マンパワーも時間も限られているので、「そこまでの質にするのはやめておきませんか」という話をし、持続可能な状態を目指しました。

現場の職員がたくさんシミュレーションをして、トライ&エラーを繰り返しました

法人の理念や事業計画に沿って職員に意見を出していただくということが大事なと思います。

プランの大枠は法人が決め、実践段階では施設長が音頭をとりながら、**現場が具体的にシミュレーションして、良さそうな事は一つずつやりました。**職員に無記名式のアンケートを行い、**反対意見もちゃんと出していただき、課題を皆で共有しながら、トライ&エラーを繰り返したことは、成功のポイント**かもしれません。

例えば、夜勤帯の対応について、どんな動きが良いとか、情報や目的の共有ってどうやって達成できるかなど打ち合わせをしていた時にインカムを使ってみようというアイデアが職員から出てきました。

もともと、ナースコールと連動した PHS があったので「2 台持つのは大変、なるべく持ち物は少ない方がいいのでやりたくない」と、施設としてはインカムに対し否定派でしたが、とりあえずやってみようということになりました。

センター（※北九州市介護ロボット等導入支援・普及センター）の使用貸出制度を利用して、夜勤帯で使っていくうちに、日勤帯の方がもっと活用できるんじゃないかという意見が出て、日勤帯でも使用してみると、やっぱり便利だねと実感しました。**インカムは、機器の価格やランニングコストの面からも安価ですので、導入しやすい**と思いますね。

コンサルタントやセンターなど外部の方と進めたことで組織としての成長にも繋がりました

業務量調査を行うコンサルタントの方やセンターの方から、他の施設さんの取組について情報をお聞きしたり、施設で考えた取組について「今の考え面白いですね！」と意見をもらったりしました。

特に、1 日の業務量を測定してデータで返してもらったことで、客観的に業務を可視化でき、職員も「すごくわかりやすかった！」と言っていました。

取組へのフィードバックがリーダーや施設長など施設内からにとどまらず、第三者からの評価もある方が納得感があり、現場の職員にも受け入れ易かったようですね。外部の方と一緒に話せたことはすごく良かったです。

現場からは「また福祉機器展などに行ってみましょうか」という発言が出てきており、**職員の意識の変化を感じました。**介護ロボットを導入するという目的というより、そこから何か業務改善のために繋がるヒントがあるんじゃないかと現場のリーダー達は考えていると思います。

今回プロジェクトをやり遂げたことは職員の自信にもなっています。さらに、施設内でコロナのクラスターが発生した時、北九州モデルに取り組む時の連携体制は、すごく活きました。**職員同士の繋がりも深められ、組織としての成長に繋がる事が出来た**と思います。

良い雰囲気ですねとご家族の方から言っただけが増えました

今回の取り組みを通じてメディアに出る機会もあり、ご家族の方から「見ていてよくわかりました」とか「今回の取組は結構よかったですね」など、言っただけなのは嬉しかったです。

行政を含めた第三者に取組を見てもらっている事がご家族の皆さんの安心感にもなりました。北九州モデル導入を通して、多くの繋がりをいただけたと思います。

業務課題の抽出、その解決案の検討、実際に着手する施策の決定と、現場の皆さんの負担は非常に大きかったと思います。ただ、現場の皆さんの参加意識、目的意識が非常に高く、率先して課題解決に取り組む姿には、とても感銘を受けました。伴走支援として、終始お手伝いをさせていただきましたが、一番の成功の鍵は現場のモチベーションであることを再認識しました。

北九州市介護ロボット等導入支援・普及促進センター センター長 樽本 洋平



「北九州モデル」導入の流れ

全会議数…8 回 相談回数…8 回

R3.6 月 施設内環境調査 [21～22日]*タイムトライアル調査(24H)

R3.7～8 月 体験展示場見学、試用貸出 (インカム、コミュニケーション機器、移乗機器)

R3.7 月 見守り機器・インカム導入

R3.9 月 課題検討

R4.1 月 北九州モデルの実践・報告会

*タイムトライアル調査とは

介護業務および看護業務について、時間計測専用アプリを活用し、24 時間分のそれぞれ業務にかかっている時間を調査すること。